

モンゴル EX 2013

Team A



# 目次

— 団長挨拶

— Ex 日程

— 事前勉強会報告

— フリーエッセイ

— 必要な持ち物リスト

— 編集後記

## 団長挨拶

空が信じられぬくらい低いところからはじまり、その広い空とはりあうように、広大な草原が続いていく。時代に合わせて言うならばジブリの「風立ちぬ」の中で空に想いを馳せられる主人公のような気分。人間のおいにすら希薄なモンゴル。そこには風の音しかない。見えるのは草の緑と空の青のみ。ごまでも散らかしたように見える動物の群れ、置物のように動かない。そんな様子から自らの愚かさを感じる。

僕はモンゴルで海外から来た多くの老人たちと遭遇した。見るからに優雅、気品も備えており、高売目的ではない。

話を聞くと皆、人生を忘れるために来ていた。地球が始まってから手付かずな土地が多いこの国はやはり特別な魅力があるのだろう。結局自分もその虜となった。

最後には世界中に流れている時間がとても同じと思えなくなる、それだけ僕らは忙しさを求めているのだ。

荘厳な香りがする。

同じ時間には戻れない。

だからもう一度帰ろう。

人間世界のいやな思い出も、きれいに洗い去ってくれそうであった。

## モンゴル Ex.日程

### 0日目 ウランバートル

チンギスハーン国際空港着→ウランバートル市内  
パレスホテル宿泊

### 1日目 草原

バスで草原に移動  
モンゴル人メンバーと対面  
キャンプファイヤー

### 2日目 草原→テレルジ

バスでテレルジ国立公園に移動→かめ岩鑑賞

### 3日目 草原

モンゴルの伝統的なゲーム体験  
ヤギとのたわむれなど

### 4日目 草原

乗馬体験

### 5日目 草原

遊牧民生活体験

### 6日目 草原

乗馬・遊牧民生活体験

### 7日目 草原

乗馬・遊牧民生活体験

### 8日目 草原→ウランバートル

各グループに分かれてホームステイ→自由行動

### 9日目 ウランバートル

自由行動

### 10日目 ウランバートル

民族舞踊コンサート→さよならパーティー（カラオケ）

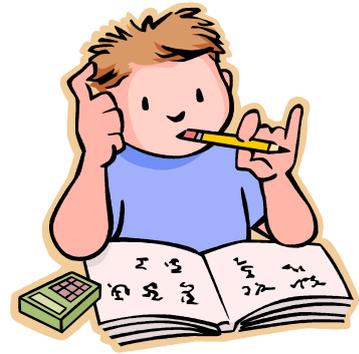
### 11日目 ウランバートル→空港

チンギスハーン国際空港→帰国

# ☆☆☆事前勉強会☆☆☆

日にち

2013年 7月27日~28日



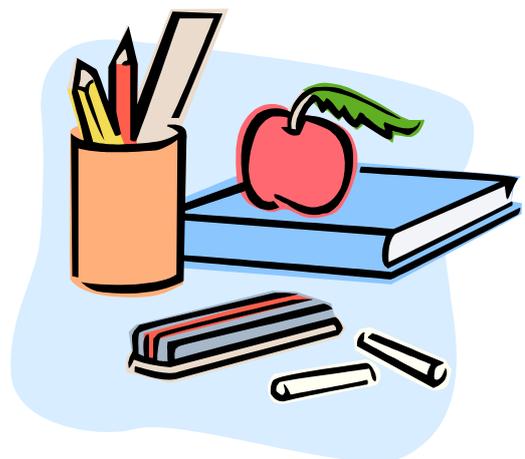
スケジュール

<1日目>

- 12:30 阪急六甲駅集合
- 13:00 六甲パーラー到着
- 13:30 勉強会開始
- 13:50 発表 ①歴史
- 14:10 発表 ②観光地
- 14:30 発表 ③食文化
- 14:45 休憩
- 15:05 発表 ④宗教
- 15:25 発表 ⑤経済
- 15:45 発表 ⑥日本について
- 17:00 フリータイム 夕食調理開始
- 18:00 カレー大会、座談会

<2日目>

- 09:00 チェックアウト完了



# ☆歴史☆

## 基本的な歴史

1911年	辛亥革命、中国（清朝）より分離、自治政府を樹立。
1919年	自治を廃止し中国軍閥の支配下に入る。
1921年7月	活仏を元首とする君主制人民政府成立、独立を宣言（人民革命）。
1924年11月	活仏の死去に伴い人民共和国を宣言。
1961年	国連加盟。
1972年2月	日本とモンゴル外交関係樹立。
1990年3月	複数政党制を導入、社会主義を事実上放棄。
1992年2月	モンゴル国憲法施行（国名を「モンゴル国」に変更）。

## 有名な歴史的人物

### <チンギス・ハーン>

チンギス・ハーンは中世モンゴルの英雄。モンゴル帝国の建国者（太祖）。12～13世紀のモンゴルに割拠し周辺諸国を次々と討滅、アジアにまたがるモンゴル帝国を打ち立てた。その征服事業は子孫達にも受け継がれ、ユーラシア広域を版図に収めた大帝国内に発展した。



### <フビライ・ハーン>



フビライ・ハーンはチンギス・ハーンの孫で、三代目モンゴル帝国の皇帝。チンギス・ハーンの死後、巨大な帝国は息子たちにくつつか分かれて受け継がれる。もっとも重要なモンゴル草原を継承してモンゴル帝国の皇帝になった。しかしフビライ・ハーンはモンゴル遊牧民の悲願である、漢民族の王朝・宋（中国の南部）を滅ぼして、元の初代皇帝になります。そして今の北京（大都）に都をおきます。マルコポーロの「東方見聞録」や日本の元寇で有名。

## <ナラントール・ザハ>



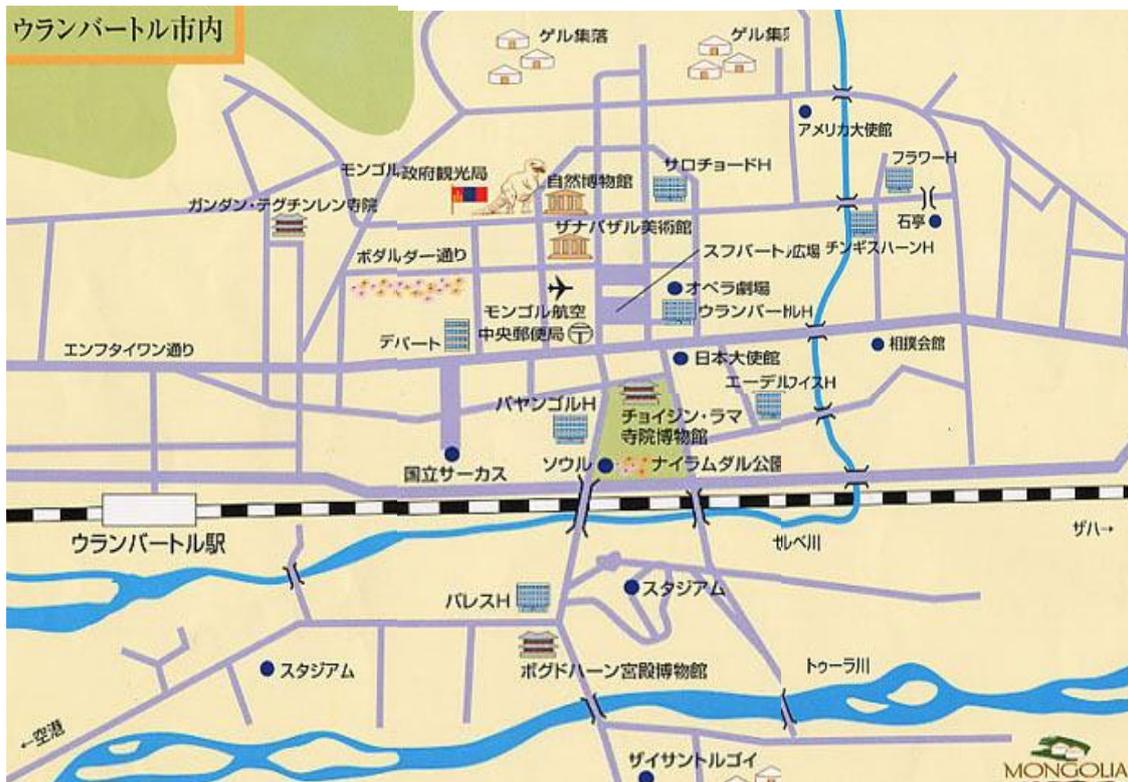
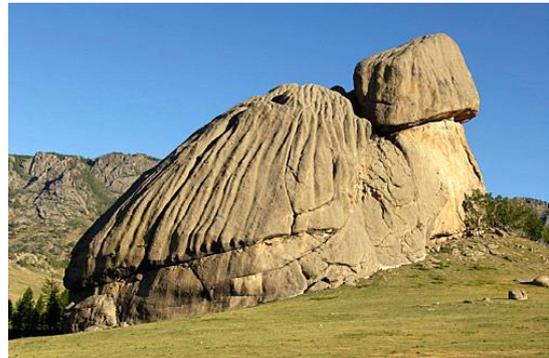
モンゴル語で場を「ザハ」（「端」という意味）という。集落の片隅にあった物々交換ポイントが発祥だったようですが、多種多様な商品が、ここにいけば全て揃う、便利で気軽にいける賑わいショッピングスポットとなりました。し



かし泥棒やスリが多く、治安はとても悪いので要注意。

## <テレルジ公園>

山と緑の風光明媚な保養地。亀の形をした亀岩や、岩山には探検ができる洞窟もあり、また、季節によっては色とりどりのかわいらしい花を楽しむこともできる。モンゴル人の保護地にもなっており、ホテルやツーリストキャンプもたくさんある。



## ☆食文化☆

### 羊肉

肉料理は羊肉が中心で、蒸す料理が中心で、生食は一部の例外を除いて、ほとんど行なわない。モンゴルの肉料理は世界の民族料理と比較して、香辛料をほとんど使わないのが特徴である。モンゴルは寒冷な気候のため、肉の保存や消臭用の香辛料を必要としなかったという説もある。ボーズというミンチした羊肉の入った蒸した肉まんや、ハンシという水餃子、ホーショールというピロシキのような軽食などがある。



<ボーズ>



<ホーショール>

### 乳製品

#### <馬乳酒>

馬のミルクから作るお酒。中国を代表するお酒、馬のミルクから作るということで生産量はそれほど多くないが、スーパーや土産でも入手可能。ただし、スーパーで売られているものと、手作りの草原の味とはまるで違うので、市販のものだけで味を判断するのは禁物。



#### <スーティーツアイ（ミルク茶）>

モンゴル料理で代表的な日常の飲み物である。黒茶の磚茶（たんちゃ）を削りお茶を煮出し、牛乳やラクダ乳などの乳と塩（モンゴル岩塩）を加え、沸騰させないように加熱しする。



## ☆宗教☆



### 主な宗教

大別して民間宗教とチベット仏教のふたつ。民間宗教とは厳しい自然のなかで暮らす遊牧民が天、地、その他生けるものすべてを信仰の対象としている。

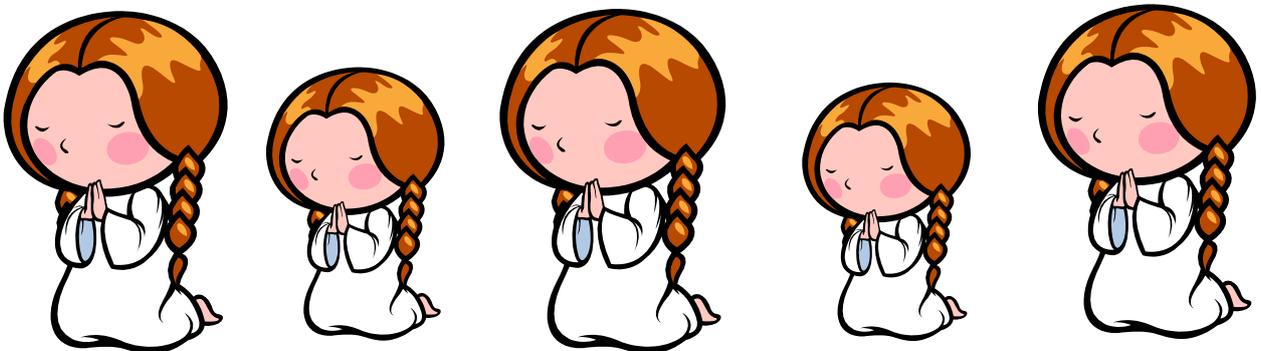
チベット仏教は、社会主義時代は衰退していたが民主化(1990年)以降に復活。1992年2月の新憲法は信教の自由を保障している。

### シャーマン・シャーマニズム

シャーマンとは巫女や呪術者のような者。シャーマンはツングース語「[aman](#)」に由来し、トランス状態に入って霊と交信する現象を起こすとされる。この現象自体や現象に基づく思想をシャーマニズムと呼ぶこともある。

日本においても、邪馬台国女王の卑弥呼が用いたという「鬼道」もシャーマニズムと言われている。

男性のシャーマンは「ボー」と呼ばれ、女性のシャーマンは「ウドガン」と呼ばれる。シャーマンは自分の属する部族により選ばれ、知的、霊的財産の伝達者、またはその部族の指導者となる。前世においてシャーマンだった人が再びシャーマンとして選ばれることはない。シャーマンは特定の個人や一群の人々が選ぶものでもない。



# ☆経済☆

## 基本的な経済情報

主要産業	鉱業，牧畜業，流通業，軽工業
名目 GDP	10,271.4 百万米ドル（2012 年，世界銀行）
一人当たり GDP	3,673 米ドル（2012 年，世界銀行）
経済成長率	12.3%（2012 年，NSC）
インフレ率	14.0%（2012 年，NSC）
失業率	約 8.2%（2012 年，NSC）
通貨	トログ（MNT）
為替レート	1 米ドル=1,359.40 トログ（2012 年通年平均，NSC）
貿易総額	11,123 百万米ドル（収支：-2,353.6 百万米ドル）（2012 年，NSC）
	<輸出> 4,324.7 百万米ドル
	<輸入> 6,738.3 百万米ドル



## 主要貿易品目

- <輸出> 鉱物資源（石炭，銅精鉱，蛍石），原油，牧畜産品（カシミヤ，皮革）
- <輸入> 石油燃料，自動車，機械設備類，日用雑貨，医薬品

## 主要貿易相手国（上位 5 か国）

- <輸出> 中国，カナダ，ロシア，イタリア，ドイツ
- <輸入> 中国，ロシア，アメリカ，日本，韓国（2012 年，NSC）

## 日本との貿易関係（財務省貿易統計）

- <貿易額>（2012 年）295.85 億円（収支：日本側が 254.65 億円の黒字）
  - モンゴル→日本 20.60 億円
  - 日本→モンゴル 275.25 億円

- <主要品目> モンゴル→日本 鉱物資源（石炭，蛍石），繊維製品，一般機械
- 日本→モンゴル 自動車，一般機械，建設・鉱山用機械

~Free essay~

池村綾花

前田美樹

南井愛加

八嶋勇人

泉秀和

上野元大

内田千晴

川原陸

坂平美和

高田啓一

竹本昌弘

田中麻希

清水春花

杉谷香波

中瀬有紀

中山聡

早川友美

平岡愛

森井圭一郎

山口友実

山下翔矢

安藤実

菱刈真衣

\*おもてなし

- ・モンゴル人は本当におもてなしの心があると感じました。何かを手伝おうとしても、座っていていいよと言われることが多かったです。  
→モンゴル人は、日本人に楽しんでもらおうと、自分の体調が悪いときでも必死に動いてくれていました。その環境に日本人が少し甘えすぎている部分があったと思います。お客様感覚で Ex.に参加してしまっている人も多かったのではないのでしょうか。私自身も、体調を心配することしかできないことに無力感を感じていました。

\*対人関係

- ・モンゴル人が何かをしてくれた際に、「ありがとう」というと、友達なのに「ありがとう」や「ごめんなさい」はいらないと言われました。  
→事前に勉強会で、モンゴル人は言葉でなく行動で感謝の気持ちを伝えるということ学びました。「ありがとう」と思っている、それを言葉にするのではなく行動で伝えるのかな?と思いました。
- ・1日に何度も電話をしていました。また、私が日本に帰ってから、メッセージや電話がくることが多いです。  
→常に連絡を取り合うことで、人とのつながりを大切にしているように思えました。モンゴルでは、日本でよく使われているアプリケーション「LINE」がインストールできないそうです。これが将来普及すると、1日に何度もしていた家族や友人との電話が、減ってしまうかもしれません。

\*交流

- ・モンゴル人の中には、日本語をとてもし上手に話せる人もいれば、あまり話せない人もいました。  
→やはり、日本語を上手に話せる人との交流が増えてしまったように思えます。あまり上手に話せない人とは、スポーツや食事の際の交流がメインとなり、ゆっくりと話す機会を作ることができませんでした。自分があまり上手に話せない人の立場になり、どのように交流したら良いかをもう少し考えるべきだったと思います。

\*感想

Ex.に初めて参加させていただきましたが、モンゴル Ex.がこんなにも楽しいことや考えることが多いプログラムだとは思いませんでした。私は今回モンゴルで多くのことを吸収してきましたが、彼らに何か与えることはできたのでしょうか。Ex.に参加するにあたって、立てていた目標が少し曖昧だったかもしれません。より明確な目標を持って Ex.に参加することで、得られるものは変わってくると感じました。

## “モンゴル” タクシーから考えたこと

京都支部  
同志社女子大学 4 回生  
前田 美樹

「タクシー」これが一番モンゴルに行き驚いた文化である。「同じ方向で困った人がいれば乗せていく」つまり道を走っている車ほとんどがタクシーと捉えても良いそうである。お金を取るというより連れていったお駄賃として少しお金を貰う、このような感覚で人を乗せている気がした。注意しておくが、もちろん日本で一般的に走っているように、仕事として働いている人達もいる。私の驚いた一番のタクシーは、助手席に可愛い女の子を乗せている親子タクシーである。走っている最中、時々後ろを振り返っては見つめてくる姿についつい心を奪われてしまった。

次に「モンゴル人は人との繋がりが濃く温かい」私はこの事を日本人に伝えたい！ホームステイ中モンゴル人メンバーは、私達をおもてなししようとウランバートル市内の至る所の観光地に連れて行ってくれる。その時に小学校の友達、高校の同級生、彼氏の友達など多くの人達が私達のために車を出してくれた。「とある観光地に水知らずの外国人を連れて行くためだけに、久しぶりに会う友達を呼ぶ」そう！私としては「連れて行くためだけに」と心小さく捉えてしまうのである。他に友達の家を借りてお酒を飲む。場所を貸してくれた肝心の友達は、鍵だけ渡して家にはいないのである。これは日本では考えられるだろうか。

ウランバートル市内を走っている「タクシー」にしても、車・家を貸してくれる友達にしても現代の日本では、違和感無く有り得るだろうか。孤独死、都市の人との繋がりが薄いと噂される日本現代、昔はモンゴルのような上記の文化があったかもしれないが、経済が発展するにつれ、消えてしまったのかもしれない。経済が今からさらに発展していくモンゴルで、人の温かさを象徴する「タクシー」の文化、これは失われて欲しくない。経済の発展と関係しないということを証明して欲しい。そして日本でもタクシーの運転手が殺される事件など、人を信じることを忘れてしまう悲しい事件が無くなって欲しい。そのためにも、モンゴルでの体験した文化や感じたことを自分の中に秘めるだけでなく、このような報告書を筆頭に、伝えていくことを忘れてはいけないう。それが Ex.参加者の義務であり役割だと私は思う。

タクシーを停めている時→



## 今後モンゴル Ex.に参加する人に伝えたいこと

南井 愛加

私は、モンゴル Ex.に参加する前に、「モンゴル Ex.に参加すると、こんなことができるんだろーなー」というイメージがありました。これを読んでいる人も、モンゴル Ex.のイメージってあると思います。例えば私は、何もない草原で、ゆっくり自分自身について考えたいという思いが秘かにありました。

実際に草原に行ってみると、思った通り、いやそれ以上に辺り一面が草原でした。それはもう、限りなく。すると同時に、限りなくすることがないわけで、ひとりになれる機会も多かったはずです。草原生活が始まると私は、仲良くなったモンゴルの友達や、日本人メンバーと遊び、笑いほうけて過ごしているうちに、用意していたノートがあまり進んでいない事に気がつきました。でもそれよりも新しい友達と交流したり話す方に食指が動いていました。そこで私自身が「協調を好む性格」であることが改めてわかりました。ここで私は、ひとりの時間を作って考えたいと思っていたことが、Ex.中の交流を通して解決したことに驚きました。

それ以外にも、モンゴル人の日本語を覚えようとするひたむきさに感化されたり、ホームステイでうまく日本語が通じずにもどかしい思いをし、言語の重要性に改めて気づいたり、逆に言葉が通じなくても深い繋がりもできました。こんな風に交流を通して新しい発見が沢山ありました。

何が言いたかったかという点、「何もすることがないモンゴル」だからこそ、日本人とモンゴル人の集団生活の中で自分自身の新たな発見が沢山ある、ということです。今これを読んでいるであろう皆さんの「何かすることがある日本」のレンズで見るモンゴルはまたちょっと違うと思います。「モンゴルでエキゾチックな体験がしたい!」と思っても、その想像とは少し違ったエキゾチックな体験ができると思います。良い意味で。想像と実際は違っていいのです。その違いを楽しめばいいのです。

今回のモンゴル Ex.で日本人23人、23通りの感じ方があったと思います。なので、興味のある人は他の人の報告も読んでその違いを比べてみるといいと思います。去年の報告書にもまた違った魅力が書かれていると思います。もちろん文字や写真だけで伝えられることには限りがあるのでこの報告書を読んで気になることがあれば、ぜひ経験者に実際に話を聞いてみてください。

## 「モンゴルで感じた事」

神戸支部 甲南大学 4回生 八嶋勇人

モンゴル Ex.は僕の人生の中でも本当に印象的で、大切な時間を与えてくれました。  
出発までに写真で見ていた自然は予想よりも遥かに雄大でした。その中で最高の仲間と過ごした  
この Ex.は僕の大学生活の大事な大事な思い出です。

今回は、その思い出になるまでに感じたことを書いていきたいと思います。

僕は今までの経験から、「皆、常に何かに悩んでいる」と考えるようになりました。

その言葉がズバリあてはまったのが今回のモンゴル Ex.だったと思います。

「モンゴルで10日間過ごす」という1つ看板の下とは言え、それぞれが違う目的を持って参加し、それぞれ性格、価値観、能力が違う人たちが40人近く集まるわけですから「悩み」は避けられないと思っていました。

他のメンバーの事、自分自身の事。日本人の事、モンゴル人の事。日本の事、モンゴルの事。

悩みは尽きなかったと思いますし、僕自身尽きる事は有りませんでした。

それを打ち明けて、改善して。胸に秘めて、納得して。

削りあげた結果が、最終日に感じた「寂しい」という気持ちだと思います。

寂しいと感じるということは過ごした日々が充実していた証拠という言葉の通り、僕たちの過ごした10日間は悩みの分だけ充実していたと確信しています。

もう1つ、強く感じた事、実はこのモンゴル Ex.は僕の5回目の Ex.なんです。

今まで参加した Ex.と比べても最も強く「感謝」を感じた Ex.でもあります。

1番初めに話しかけてくれた人、常に横に居てくれた人、心配してくれた人、仲良くなろうとしてくれた人、仲良くなりたいと思ってくれていた人。

日本人、モンゴル人関係なく、ささいなことに常に感謝、感動していました。

それは学年から来る違和感を僕自身気づかぬうちに感じていたからかもしれません。

ですが、日々が過ぎていく中でそんな違和感もいっさい感じる事は有りませんでした。

それは皆の存在があったからだと確信しています、ありがとう。

以上で僕がモンゴルで感じた事は終了です。

最後にこれほどの感謝と感動を与えてくれた I.S.A.の関係者の皆様、モンゴル人メンバーの皆様、そして何よりも日本人メンバーの皆様、本当に本当にありがとう。

今モンゴル Ex.への参加を悩んでいる方へ、雄大な自然と余り有る時間が与えてくれる感動は、綺麗から来るものだけでは有りません。

悩みと苦勞を乗り越えたからこそ貰える感動も、このモンゴル Ex.の特徴だと思います。

私、八嶋勇人の報告は以上です。



## モンゴル Ex.を通じて

京都支部 2回生 上野元大

モンゴル Ex.での一番の目玉はなんといっても「草原」360度見渡す限り緑の世界。そこにぽつんとゲルがあるのみ。日本では絶対に味わえない時間。それを1週間も体験できた。そのことは今後の人生の中でもかけがえのない、忘れることのできない生活、経験となりました。

その一方で忘れがちなホームステイでの生活。自分はこのホームステイでも草原と同じ、もしくはそれ以上の体験ができたと思っています。なぜなら、モンゴルの首都ウランバートルを歩くことだけでも新鮮な経験だらけだからです。いや、新鮮な経験という用語弊があるかもしれませんが。いくなれば途上国特有の勢いが、これからくる時代の波、流れをまざまざと見せつけられました。



いたるところに建つ建設中のビル、鳴り響くクラクション、整備されきっていない道路、ぽつんと建つ外資のホテル。日本では感じられない成長している都市の鼓動を感じることができたことが大きな喜びでした。それは街の風景だけでなく車の運転からでも、買い物をするだけでも感じることができました。悪く言ってしまうと、無骨であらう。けれども今の日本にはないものがたしかにある。それが何か、言葉に表すことは難しいけれども、急速に発展しているモンゴル、成長するビルとは不釣り合いな交通事情や生活水準。経済の発展に生活が追いついていない、数十年前の日本とよく似た状況に立っています。そこからどんな発展をとげていくのか、果たして日本と同じ道を歩むのか、もしくはほかの道を模索するのか。

どんな発展をモンゴルが遂げるのかはわからないけれど、10年後、いや5年後もう一度モンゴルに来て発展の結果を見たい、そういうふうに思います。

## 「わたしとモンゴル」

九州支部 2 回 内田千晴

わたしが I.S.A.に入ろうと決めた理由、それがモンゴル Ex.だ。新歓のときモンゴル Ex.の  
写真やムービーを見せてもらい、自然と馬が大好きだったわたしはモンゴルの雄大な草原  
の中で馬に乗ったり遊んだりできることに魅力を感じ、I.S.A.への入部を決めた。1 年目の  
夏は初めてのバイトでお盆は特に忙しいから休まないでくれと言われ、断りきれず断念し  
た。そのため今回の参加は待ちに待ったモンゴルだった。出発前、わたしは予定表に目を  
通しすべてのアクティビティを手帳に書き込み、とても楽しみにしていた。

しかし実際モンゴルについてみると、楽しみにしていたアクティビティもなく、10 分程度  
の乗馬体験と 1 回の観光しか用意されていなかった。ほかの仲間に聞くとモンゴル Ex.はそ  
んなものらしいよと言われ、話をきいたり報告書に目を通したりしなかったのがわるいの  
だが、わたしは楽しみにしていた分すごくがっかりした。なんの予定もない一日。なんの  
ためにモンゴルまできたのだらうと落ち込んだ。携帯はつながらないし電池もすぐにきれ  
た。あるのはただ果てしなく続く草原のみ。日本にいたころは毎日学校やサークル、バイ  
トや遊びなど予定が詰まった日々を送っていて本当に何もない時間を過ごすのはいつぶ  
りだろうかと思った。「ご飯できたよ」の声で 11 時に起き、絵を書いたりおしゃべりしたり、  
遠くを眺めたり走り回ってみたり、、お腹がすいてきた夕方頃お昼ご飯を食べまた遊ぶ。  
夜にはキャンプファイヤーの周りで飲んだり踊ったり騒いだあと疲れたら寝る。何にも追  
われず、いつしか時間を気にすることもなくなり自分のやりたいことだけをやる。日本に  
いた頃にずっとしてみたかった憧れのことだった。「時間がもったいない」「効率が悪い」「要  
領よくやる」いつもバイトや勉強のときに言われ考えていたことだった。それを忘れて過  
ごす時間はわたしにはとても新鮮で貴重だった。

モンゴルで過ごした 10 日間はそんな感じだったが、この生活も 10 日間で満足、というの  
がわたしの正直な感想である。わたしの性格上何かに刺激を受けたり、追われていないと  
何もしないので、飽きてしまう。また時間を守らないというのは人の時間をも無駄にして  
しまうと思ってしまうので合わない。そう考えるとモンゴルはわたしとは逆の性格だなと  
思った。何事も加減だとそう思った。

モンゴルに来てモンゴルのよさも感じることはできたが、同時に日本のよさも改めて感じ  
ることができた。

最後に、このプログラムに関わったすべての人に感謝を。バイラルラー！ありがとう！

## モンゴル Ex.で感じたこと

神戸支部二回生 川原 陸

私は今回のモンゴル Ex.が初のプログラムで、期待と不安を抱きながらの参加であった。事前の勉強会でモンゴルについて調べたときは、モンゴル人の特徴としてあまり感情表現を表に出さず、寡黙な印象だと思い込んでいたが、実際話してみると全くそんなことはなく、むしろとても積極的で温かい人たちばかりだった。言葉はなかなか通じなかったことが多かったが、フィーリングで分かり合えたことに感動した。

モンゴルでの草原生活は自分の想像していた以上に壮大なもので、あたり一面何も無い草原、満天の星空、幻想的な夕日、どれをとっても非常に新鮮なものだった。草原生活をしていた約一週間、時間をほとんど気にすることなく気ままな生活を送り、日本に帰ったかこんな生活は絶対にできないと思いながらも、改めて時間の大切さについて考え直された気がした。日本で生活していると大学の授業、アルバイト、サークルなどの様々な活動、テレビ、インターネット、スマートフォンなどのメディアに主要な時間を割いて、自分の将来や現状について落ち着いて考える機会が少なかったように思われる。この Ex に参加して、いろんな人の考えや夢について聞き、自分と向き合う時間が得られたのはとても貴重な成果だった。

このプログラムは自分の視野を押し広げてくれて、未知の世界を経験することができた。これに満足せず、これからも様々なプログラムに参加してたくさんの人たちと交流し、視野を広げていきたいと思う。

これまで3回 Ex.に参加してきましたが、帰国してからこれほどまでに寂しさを感じたのは初めてです。私の中でモンゴル Ex.は「充実していた」とか「楽しかった」とかでは言い表せないほどに、本当に色々感じた時間でした。

まず飛行機が着陸態勢に入ったとき「こんな所に着陸するのか！」と驚いたのを覚えています。空の上から広大な草原を見て本当にモンゴルに来たんだという感動と、この草原の上で一週間生活するんだという不安交じりのワクワクを感じました。その草原での生活を端的に表すのは難しいのですが本当に素晴らしいひとときだったと思います。水無し、風呂無し、雨が降ればトイレにも行けない生活は時には不便でしたが草原らしい生活だったと思います。またどっかのゲルに入れば誰かいて、外に出れば誰かが遊んでいる光景もすごく好きでした。夜になれば流れ星がたくさん流れる星空も最高でしたし、星空の元でごろごろしたのも極寒だったけど楽しかったなあ。どれもこれももう見られないのかと思うと泣きそうになるほどに寂しいです。

個人的にはみんなで遊んだり話したりした時間も好きでしたが1人でぼーっとする時間も好きでした。空と草原とゲル、色は青と緑と白と別に何かがあるわけでも無いし、色々移り変わるわけでもないけどなんとなく心洗われるような幸せを感じました。ぼーっとしすぎて周りに心配されることも多々...笑 これは草原での生活のほんの一部にすぎないけれどもとにかく自由にのびのびと過ごすことができた7日間でした。

その後のシティーステイも観光にクラブにカラオケにと非常に濃い時間を過ごせました。そして何か弾けました。いろんな意味で笑

Ex.中はもちろん大変だったことも辛かったこともしんどかったこともありました。が、それ以上に毎日毎日楽しくてたまらなかったです。プログラムスタート後4日目にあわてて日記を書き始めたんですが、毎日充実していて読むたびに戻りたいなーって思います。草原で「なにかしたい！」という感情のままに過ごす日々も、ごろごろしながら語ることももう無いし、クラブで踊り狂うこともフェアウェルで騒ぎ立てることももう無いんだなと思うと悲しいです。一緒に参加したメンバー1人残らず全員で集まることって、プログラムが終わってしまうと難しく、Ex.中は本当に貴重な時間だったんだなと再認識できる時でもあります。参加した日本人メンバー全員と、色々とお気にかけてくれ一緒に楽しんでもくれたモンゴル人メンバー全員に感謝します。またいつかモンゴルに帰りたいです。

I.S.A.には2回から入りました。だからI.S.A.独特の短縮した呼び方、たとえば全国合宿をNFMと略したりするのがわからなくて、まず理解しようとする気にもなれなくてあまりなじめなかったところがあり、I.S.A.の支部会にも参加していませんでした。でも、せっかくI.S.A.に入ったのでI.S.A.で海外に行きたいとだけは漠然と思っていた時、支部長から海外行くのがあると聞いて夏休み絶対に行くぞ。とだけはきめていました。モンゴル Ex.に決めた理由も予定がそこしか空いていなかったからでした。勉強会前にはテスト前っていうのもあり、適当に選んでしまったのもありしないといけないことが多く、初めて海外に行くのでパスポート申請もしないとダメでほとんど勉強会の調べものをせずに挑んだことでしょっぱいものになってしまいました。でも、そこで先輩や同期、後輩の真剣でまた面白い発表を聞いたことでモンゴルに惹かれ、帰りに“世界の歩き方”を買って自主勉教までするようになったことを覚えています。仲間で一丸となって目標に進むと周りのやる気のない人までもその気にさせるということを身をもって学びました。

荷物準備が出発の前日のバイト終わり 11時からだったので、近所の24時間スーパーを何往復もしました。日本と違って薬も何もかももっていかないといけないことを痛感しました。やはり数日前には準備しておかないと痛い目にあうということを学びました。

モンゴルに行く飛行機でびっくりしたことは座席の前にモニターがあり、最新映画を見れることでした。しかし、見るには見れたのですが、前の人が添乗員に怒られても座席を倒してくる人だったので、アイアンマンが7cmくらいのところで飛び交って目がしんどくなったのがつらかったです。しんどい時は自分の信念を曲げても寝たほうが良いということと、韓国人はかなり自己中心的なところがあるのだということを学びました。

モンゴルに着くと初日はホテルで泊まりました。人づてで外国の水は危ないとだけは聞いていたので、シャワーは目をつぶり鼻と口を閉じてビクビクしながら入りました。水で学んだことは、1回は自分で体験してみるということです。何事も人から聞いただけでなく自分で体験するのが1番です。かくゆう僕も2日目からは普通に飲んでいました。

ゲル生活で学んだことは、電気機器がなくても生活が変わらないということ、しかし、大型家電はあったらすごく便利だということです。あと、夜が寒すぎるのでおなか冷やしたらおなか壊すということです。もう1つが人は自分がおかれた状況にすぐ慣れることができるということです。最初はバッタを嫌がっていた人が何事もなく歩くようになっているのを見て思いました。

最後に一番大切なこと、下ネタは全世界共通だということです。下ネタは同性には最高の心の距離を縮める道具です。異性には間違っても使ってはいけません。距離が広がる可能性があります。

これらが僕がモンゴルで学んだことです。

モンゴル Ex.2013

大阪支部 二回 関西大学 竹本昌弘

I.S.A.に入って初めの参加となったのがモンゴル Ex.の企画です。最初はモンゴルに行って自分が異国の地でしっかりやっていけるのかとても不安があった。言葉とかも通じるかわからなくて不安などもあったが、モンゴル人の人たちはとても日本語がうまい人達がいって問題なくできてよかった。通じない時も時々あったがジェスチャーとか英語などでなんとかなったと思う。モンゴルは限りなく広がる草原がとてもきれいで夜も星空や流れ星を見ることができ日本ではできない経験をした。ゲルでの生活も思ったより居心地良く快適だった。モンゴル Ex.に参加した十日間はあっという間でとても楽しかった。日本人メンバーともモンゴル人メンバーとも仲良くなれてとてもいい経験になりました。モンゴルでの生活は日本では経験することのできないとても大きなものを得ることができたと思う。日本では、時間に追われる生活で休む暇もあまりないが、モンゴルでの生活は時間を気にすることなく好きなことができ普段はできないことができた。モンゴルは日本とは生活リズムも全然違った。でも、そういう経験もできよかったと思う。お互いの文化紹介も楽しくできよかった。私は、このモンゴルが初海外で貴重な経験ができた。残りの大学生活も海外に行っているいろんな国の文化や習慣を見てみたいと思います。このモンゴル Ex.に参加してとてもよかったと思います。大学生にしかできないことをこれからも見つけていきたいです。モンゴルで培った経験や知識をこれからの人生にも生かせるように頑張っていきたいと思います。

## 「モンゴル」

岡山支部 2回 田中麻希

モンゴル Ex.に参加することは、私にとってずっと念願だった。日本ではできないことがたくさん経験でき、初めての文化に触れ、期待以上の貴重な思い出をつくることができた。

ホームステイでは、いくつか気付いたことや感じたことがある。私は以前フィリピン Ex.に参加したことがあるのだが、フィリピンでは街のいたるところにゴミが落ちており、少し汚いという印象を受けた。また、ホームレスの人たちが道の橋でうずくまって寝ている光景もまったく珍しくなく、汚れた服を着た子どもにお金をせがまれることも多々あった。モンゴルも似たような状態かと勝手な先入観を持っていたのだが、それに反して街は割ときれいで栄えており、ホームレスらしき人々も全く見受けられなかったことには驚いた。ウランバートルの街は「開発真っ只中」という感じだった。たくさんの施設が建設中で、歩道なども工事中であるところが非常に多かった。マンションやアパートもいたるところで作られている最中だった。そんなに次々と建設したところでそこまでニーズがあるのかという点はひとつ疑問にも思った。やはり、現地を訪れてみなければ現状などはわからないことはたくさんあるということは強く感じた。

草原は、本当にただただ草原だった。電気も通っていない、トイレは掘っただけの穴、水にも限りがある。本当に何もなかったが、これこそモンゴル Ex.の醍醐味だと感じた。パッケージツアーや単なる観光旅行ではなかなか経験できないだろう。不便に感じることもあったが、だからこそモンゴルの草原を満喫できたのだと思う。特に、夜の星空。周りに余計な光がないため、本当にたくさんの星が見え、私にとって人生初の流れ星も見ることができた。モンゴルの夜は日中との気温差が激しく日本の初冬のように寒かったが、きれいな星空はいつまでも眺めていられた。

今回の Ex.では、現地でしかできない体験や、現地を訪れてこそその発見が数多くあった。モンゴルには、いつかもう一度行ってみたいと思う。

モンゴルで感じたことなど、  
報告をランキング形式でまとめました!!

## モンゴルランキング

清水春花

### ・楽しかったこと

- ① クラブ めっちゃ楽しかったけどその後死ぬかと思った ww
- ② 流れ星がいっぱい見れたこと 本当に感動した!!!学生時代にしかできない体験。
- ③ タコあげとシャボン玉 日本でもできるけれど草原でやることに意味があった(´・ω・´)

### ・必需品だと感じたもの

- ① 正露丸 正露丸とかの腹痛系の薬は絶対いる!!絶対お腹壊すからっ!!!
- ② カップラーメン 地味にカップラーメンはいる。モンゴル人メンバーが食べてて、すっごく悔しかった。
- ③ 貼るカイロ ゲルの中が寒すぎてもうだめ。カイロは欲しい。  
(あとは、リップクリームとか、枕があるとよいと個人的に感じたな。)

### ・モンゴルでおいしかったもの

- ① ラーメン 草原で食べたナラさん手作りのラーメンは本当においしかった!!
- ② 鶏なべ ラーメンはモンゴル人メンバーも美味しそうに食べてたのに、鶏なべは口に合わなかったみたい…!!椎茸とか入っててラム肉でやさぐれた私たちの心を癒やしてくれた日本の味だったのにな(´・ω・´)
- ③ 揚げ餃子 揚げ餃子的なものもおいしかった。モンゴルの伝統料理の中で一番だと思う。あとは、あいかさんに貰った芋けんぴはまじでうまかったっ!!!!あいかさん、ありがとうございます m(\_)\_m

### ・驚いたこと

- ① ルーズ やっぱりモンゴル人はルーズだった。ストレスがたましました笑。
- ② 流れ星に対しての価値観 モンゴルでは流れ星は身近な人の死の予兆らしくってあまり良いものではないらしい。だからモンゴル人は流れ星を見ると「私の星じゃない」って3回言うらしい。でもホイガーから聞いた話だからウソかも。
- ③ みんな乙女 モンゴル人の女子はみんな乙女はだった。Kくんのことを「my prince!!」って呼んでてかわいかったなー。この歳で prince なんて使う女子は日本にいないと思う。それに、男子メンバーに手紙も書いてて、乙女だなーって思いました。私も精進します。

### ・やり残したこと

- ① モンゴル人の子ともうちよつと話したかった
- ② 日の出をみなかった 眠かったしめんどかったしで結局見れなかった…
- ② 達にお土産買い忘れた 気づいたら自分の土産しか買ってなかった笑。

# モンゴル Ex.を終えて

九州支部 2回 杉谷香波

## 草原での生活

どこまでも広がる草原と空に囲まれてのびのびと生活した7日間。日本とは全く違う環境に戸惑いながらも、わくわくする毎日。時間が有り余るという日本ではなかなか味わうことのできない感覚。何もかもが新鮮で心を解放することができた7日間だった。

モンゴルのメンバーと上手くコミュニケーションがとれるかどうか不安もあったが、初日のゲームで打ち解け、その後はたくさん関わることができた。凧揚げ、お絵描き、シャボン玉、サッカー、散歩、飲み会などなど、様々なことを通して毎日少しずつ仲を深められていく感じがとても嬉しかった。

日本人メンバーとは深い話もできて、自分の事を見直すきっかけにもなった。みんな自分の考え、やりたい事を持っていて、刺激を受けることができた。このメンバーに出会えて本当に良かったと思う。

日本に帰ってきた今、思い返すと夢のような毎日だったなと思う。最後に、毎日美味しいご飯を作ってくれた料理長、体調を崩しながらも私たちのお世話をしてくれたモンゴルのみんな、本当にありがとう！！

## ホームステイ

首都ウランバートルは草原とは全く違う、まさに「発展途上の街」という印象だった。どこに行っても工事中で土煙がまい、排気ガスと塗り立てのコンクリートの臭いがした。街中は人であふれ、賑わっていた。

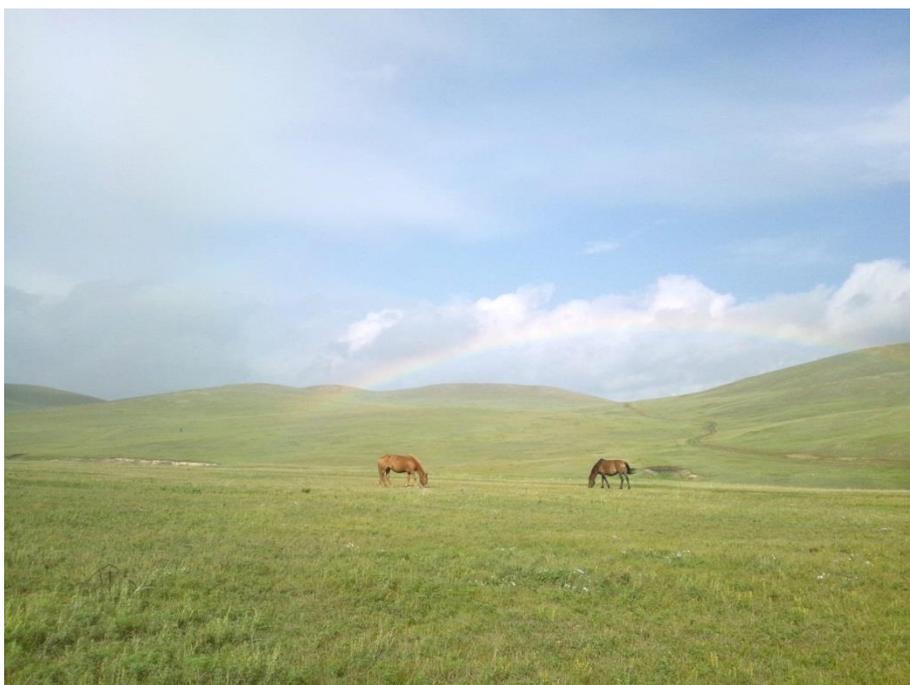
工事中のショベルカーのすぐ横を通ったり、塗り立てのコンクリートの上を歩いたり、車がきているのに信号を無視して横断歩道を渡ったり、ウランバートルでも日本では出来ないような体験がたくさんできて、刺激的だった。

観光や買い物にもたくさん連れていってくれたが、夜に上ったザイサンの丘から見た夜景が最も印象的だった。予想以上にきれいで驚いた。日本の被災地を思ってモンゴルのみんなが飛ばしてくれたランプにもとても感動したし、みんなの心遣いが嬉しかった。一緒に化粧をしたり、ショッピングをしたり、モンゴルメンバーの草原とはまた違った一面も見ることができ、楽しかった。

あいぼんと私を泊めてくれたマンダ、お世話になりました。マンダからもらった3人おそろいのブレスレットは一生の宝物。ありがとう！！

わたしの夏休み(2013)  
神戸大学 2回 中瀬有紀

草原は何もなくて、360度どこをみても緑だった。初めて草原を歩いた時、一步踏み出すごとにかかなりの数のバツタがピョンピョンはねて、とうとうモンゴルに来たんやなあ、と嬉しくなった。何もなくても毎日が楽しかった。遊んで、ぼーっとして、ごろごろして、喋って、丘を登って、お腹をすかして。待ちわびたごはんはめっちゃ美味しかった。ナラさんありがとう。あのラーメンの感動は一生忘れないと思う。夕方は夕陽を見に丘を登り、夜はお酒を飲んで笑う。流れ星に歓声を上げ、ゲルの暖炉で温もりながら話をする。寒さに凍えながら見た朝日は綺麗だったな～。慣れないトイレ、蛇口のない生活、硬い寝袋、今となっては全てが懐かしいです。帰るとき、歩き回ってもあまりバツタが跳ねないことに気が付いて悲しくなった。最高の日々をくれたモンゴルにありがとうを言いたいです。



モンゴリアンはよく眠る。  
ウランバートルの町並みは元社会主義国の香りがした。私が出会った人々はみんな日本が好きで、興味をもって接してくれた。日本語を一生懸命勉強するモンゴリアン。いつも笑ってた彼らがいつか日本に来れたらいいな。

## モンゴル Ex. teamA 報告書

関西学院大学 2回 中山聡

今回 I.S.A. のプログラムで海外に行くのは2回目でした。1回目は KJSC に参加しましたが、体調を崩してしまい、プログラム期間中のほとんどを寝て過ごしたので今回は絶対に元気に楽しんでやるという気持ちで参加しました。モンゴル Ex. については先輩などからいろいろな話を聞いていて、一番言ってみたいプログラムだったので今回参加できて本当に良かったです。まずは Before のことについて書くと、中国で万里の長城、頤和園に行き、北京からウランバートルまで国際列車を使って移動しました。モンゴルではジャギーさんの手助けもあり、ゴビ砂漠ツアーに参加することができました。このように書くと順調にしているように見えますが、実際には一緒に行った K、みちるにめっちゃ助けられました。本当にありがとう！モンゴル Ex. が始まって、最初に草原やゲルが見えた時は本当に感動しました。まずは草原についてトイレづくりからでしたが、作っている最中にさっそくウォッカが出てきたときはさすがモンゴルだと思いました。今思い返してみると、草原での7日間は長いようで短かった気がします。山に登ってみたり、シャボン玉したり、凧あげしたり、トランプしたりと日本ではないほどのんびりと過ごせてよかったです。途中雨が降った日があったのは残念だったけどきれいな夕陽を見たり、馬に乗ったりと貴重な体験ができてよかったです。ホームステイはボマの家でした。ボマの家がきれいなのはビックリでした。ボマは見かけによらず、いろいろ気を使ってくれて親切でよかったです。ただ、ボマがだらだら寝てたせいで劇を見れなかったのは残念でした(笑)ホームステイ中はなんだかんだみんなで集まる機会があって楽しかったです。ホイガーがお土産屋でクズミたいなことしてたのはめっちゃ笑いました。ホームステイ中もバーやクラブなども行けて本当に楽しかったです。最終日のカラオケも日本人もモンゴル人も盛り上がり最高でした！一日早く帰る人たちのお別れでついにモンゴル Ex. も終わるんだなと感じました。そしてホイガー家で一泊して、僕らも帰る日になりました。モンゴル人メンバーは本当にみんな優しく、別れるのが惜しかったです。パンダ帽がどうしてもほしいといわれたのであげたのが少し残念でしたがともみんなに新しいのを買ってきてもらったのでまあいいです。最後に、今回一緒に行ったメンバーはほんとにみんな個性的でいいメンバーでした。団長の K もお疲れ様！またみなさん会いましょう！

早川 友美

私がモンゴルに着いて最初に感じたことは、ウランバートルって都会！活気にあふれている！ということです。空港からホテルに向かう車内で外を眺めていると建設中の建物に目が行きます。しかし、反対側の窓を見れば、私がイメージしていたような小高い丘に羊が放牧されている、というとても興味深い風景でした。ゆったり、まったりしたモンゴルをイメージしていた私は、まず衝撃を受けました。それと同時に日本にいた時は正直、全然楽しみではなかったホームステイが楽しみにになりました。私は、いけむーさんとオヤングのお宅にステイさせていただきました。お家はマンションで、マンションの前は毎日大きい水たまりができており、舗装もされていないので車が通るたびに泥水がはねます。お家はとてもきれいで日本の大学生と変わらない生活をしているようです。また、オヤングのお兄さん、お兄さんの奥さん、弟さんが暮らしている家にもお邪魔しました。ガソリンスタンドの裏の自動車工場の片隅にゲルがありました。そこで三人は暮らしているようです。お兄さんは社会人、弟さんは大学生です。都会の工場の片隅に突然現れたゲルに驚きましたが、中は私たちが草原で使わせていただいたゲルとは大違いで、キッチンや洗面台、ベッド、ソファがあり都会の生活は違うなー、と思いました。モンゴルという国自体が都会になっていくことがよいことなのかはわかりません。しかし、E x . 中にひしひしと感じたモンゴル人メンバーの底抜けに優しい性格を考えると、日本とはまたちがった都会ができあがるんだらうな、と思います。特に活気にあふれた時代にモンゴルに来ることができ本当に良かったです！！

平岡 愛

モンゴルに行ってわたしが感じたこと。モンゴルでの生活は、本当に新鮮で未知に満ち溢れていました。草原での1週間は今までの人生で体験したことのないものでした。辺り一面が緑色で、空がとても広く、雲が動く影をあんなにくっきりとみたのは初めてでした。草原での星空、何回も流れる流れ星は本当にいままでわたしがみたことのない景色でした。

モンゴル人の方々と約10日間を一緒に過ごせて、とても濃い日々を過ごせたと感じています。わたしがモンゴルへ行く前にもっていた先入観は、いい意味で打ち砕かれました。首都のウランバートルは思っていたよりも栄えており、なんといっても『人』が心に残っています。モンゴルの人たちは愉快で明るく、とても優しい人たちばかりでした。一人で行っていたら、また違ったのかもかもしれませんが、Ex.プログラムでは、ツアーよりももっと身近に現地での生活を体験できたように思います。とても充実していました。モンゴル Ex.に参加して本当によかったです。

草原生活では常に自由な時間で、日本での日々の生活を時間に追われている毎日とはまさに真逆でした。同じ24時間。こんなにも違うものなのか、そしてこういう毎日を日常として日々を過ごし生きていっている人々がいるのか、と思うと世界は面白いなあと感じました。(生きるためにずっと暇をしているわけではないと思いますが)しかし、言葉も通じない異国の地でわたしが唯一、世界共通なんだと思ったことは『笑顔』です。こんにちは、ありがとう、そして笑顔があれば、人と人は笑いあい通じ合えるのではないかと感じました。



～変わりゆくもの。行く末～

森井 圭一郎

旅、ここでいうのは海外というものをどのようにとらえるだろうか？ なにかの目的を持っていくにしろ何もないにしろ旅は旅行者に避けられない何かを落としていくものだと思う。自分自身思うことは、好奇心が好奇心を呼ぶサイクルにはまることができる、自国にいるより調子に乗れる、自身の人生の形に残るということなどである。同時に世界の人の数に驚き自分の小ささを感じ、世界平和の難しさを実感することもできる。世界平和と言っても要するに全世界の人の意識を共通させることに過ぎない、しかし世界で一番偉い人などいるはずもなくそんなことすら難しい。

だからこそ、学生間の交流、ボランティア、一人旅にしても世界とつながることには可能性がこもっている。例えば、貧困問題において日本でホームレスをたくさん見ることができ、支援する団体があるなかでさらに海外の貧困にも目を向けることができる。そして実際に目で見てきた人はさらに深く考えることができるだろう。

今回はじめて途上国を訪れたが、発展のパワー、活気というのを身に染みて感じる、というより感じざるを得なかったと思う。自分は広大な草原に立ち、世界にはまだこれだけ未開の土地があるのだと心を震わされ、しばし時間を忘れていたが、都市部発展の流れが広大な草原までおよびつつあることも分かり、この草原がどのように生まれ変わっていくのだろうかという興味もそそられた。これだけの自然も発展の流れには逆らえないのだ。

いずれすべての国が順調に発展していったらいったい世界はどんな風になってしまうのだろうか？ 自分が生きている間には見られないかもしれないが先進国にその先があるのだろうか？ 世界は人でしか作れない、衰退するこの国で生まれた日本人の自分はこれからどうやって生きていくのだろうか？

若者は話し合い、僕にも多くの野心があるがそれらも国のように衰えて寂れてしまうのだろうか。今自分が言えることは今の自分には一人で何かをする力がないということ、だからこそ誰かの力に頼って生きていくしかない。僕がこれまで得た多くの外国人とのつながりは寂れたこの国より多くの刺激を与えてくれると確信している。いまの世界の流れの中、英語すら満足に話せない日本人、特に若者はとりのこされていないか？ 僕はこの世界の行く末をずっとみていたい、そしてその中で調子に乗っていたい、そしてまわりを引き込むくらいになりたい。日本人から世界人にならなければ。

最後に共にすごした日本人とモンゴル人へ  
ありがとう、そしてこれからもよろしく

## モンゴル文化に思うこと

山口 友実

普段日本にはなかなか情報の入ってきにくい、モンゴルについてのことをモンゴルExに参加して知ることができた。これまで学校で歴史の勉強等を通じて認識していたモンゴルの印象と、実際は大きく異なるものだった。

私の中で印象的だったのはモンゴルの都心である、ウランバートルでの生活だ。中国に近いことや、伝統的な衣装が似ていることや、過去中国の民族と関わってきたことからモンゴルは中国や日本に近いかと思っていた。しかし、ウランバートル空港に着いた瞬間から、そのイメージは壊れた。統一感のない様々な色で溢れる住宅街、見たことのない形の大きな煙突、街にたくさんある現代的な電光掲示板、キリル文字…。アジアとも欧米ともいえない風景は、日本とかけ離れ、私にとって異空間だった。ウランバートルの街を見渡すだけでわくわくした。目に飛び込むものすべてが新鮮で、発見だった。ウランバートルの人々の国民性はといえば、出会う人みんながフレンドリーで、やさしくて、お酒を飲めば踊った。生活習慣やしぐさは欧米の雰囲気を感じ、しかし伝統舞踊を観に行けば、完全なるアジアテイスト。そのへんの混じり具合がおもしろくて、憧れを感じてしまうものだった。

ロシアと中国に挟まれる国、モンゴル。全く遠くない過去、その位置から様々な争いに巻き込まれた。その過程で今のモンゴルができあがった。モンゴル国としては失ったものも多いかと思う。しかし、私はそれらの過去の結果としてこの地に溢れる文化の不思議な魅力に惹かれる



私はモンゴル Ex.が初めての海外でした。初めて日本以外の文化に触れてみて色々刺激を受けました。この Ex.で思ったことは自分の英語の会話能力の低さです。私はこの Ex.で自分の英語の会話能力がどこまで通用するのか、また違う国の人との交流をするというこの二つの目標を掲げてこの Ex.に臨みました。

結果としてはまず一つ目の目標は全然伝わらなかったです。自分の中では事前に多少なりとも勉強していったので、とてもショックでした。しかしそれをバネにしてこれからの勉強に Ex.での体験を生かしたいです。

次に交流ですが、英語があまり伝わらないといったこともありあまり積極的に交流はできませんでした。しかし、英語が伝わらなくてもボディラングージなどで交流はできたのでそれらを使って交流したのでそこはよかったんじゃないかと思いました。

この Ex.を通して英語の勉強の必要性がわかったことと、異文化に触れることでしかわからないこともあるということです。

## ～モンゴルでの思い出～

大阪支部 1回 安藤実

まず一言で感想を言うと、モンゴルは本当にいい国でした！ぜひ、行ってもらいたいと思うほどです。良い経験になると思います。

モンゴルでの生活はおおまかには草原生活が最初の7日間、そのあとにモンゴル人メンバーの家にホームステイが2日間といったような感じになっています。草原生活はとても楽しいものです！初日はとりあえず、草原に到着するとトイレ作りでした。本当に原始的なものです。下半身が埋まるぐらいまで穴をひたすら掘って、周りをビニールで囲って完成です。トイレは外ですし、周りを完全に囲うっていうことはできないので嫌な人にとっては嫌かもしれません。が、これも一つの面白い経験になったと僕は思いました。そのあとは、夜まではフリーです。と言うよりも、基本的に草原での生活では予定はそれほど決まっておらず、フリーです。夜になって、夜ご飯を食べたあとキャンプファイヤーをしました。僕的には、一番楽しかった時間です。みんなでウォッカを飲んで、モンゴル人メンバーがクラブミュージックを流してくれるので、軽いノリでダンスをしました。ダンスもとても楽しかったですが、星を眺めるのもとても良かったです。日本で見ることのできる星の何倍もの数が見られると思います。天気良ければ、天の川もきれいにみえますし、流れ星も何個もみることができました。2日目以降もだいたいフリーです。決まっていたこととして3日目に馬に乗ったり、シャワーを浴びたり。シャワーを浴びることができた日は1日だけだったのですが、基本的に汗はかかないのでシャワーを浴びなくても気持ちよく過ごせます。フリーな時、僕たちは丘を登って広い草原を見渡したり、寝転がったり、走り回ったりと時間を忘れて小心に戻って遊びました。

ホームステイはみんな、それぞれ違うモンゴル人メンバーの家でお世話になるのですがそれは寝るときだけであって、基本的に昼も夜もみんなで集まって観光名所を回ったり、買い物をしたりしたので楽しかったです。

## ～モンゴルへ行こうと考える方へ～

上でも言ったように、ぜひモンゴルへ行ってほしいと思います。予定はまったく決まっておらず、何をするにしても自分たちの気持ち次第、日本ではできない時間を忘れるという経験をすることができると思います。

述べていませんでしたが、モンゴル人のメンバーはみんな優しいです！積極的に話しかけにいけば、すぐに仲良くなることができますよ！あと「郷に入れば郷に従え」という言葉があるように、なるべくモンゴルの人がやっていることはやってほしいです！やはり、ノリが良ければすぐに仲良くなれますよ。

あと、食べ物に関して言えばとてもおいしいです！ただ、モンゴルではラム肉を食べます。苦手な人は苦手だと思います。向こうの人ははっきりものをいう人を好むのははっきりと言いましょ！僕は言いました。

## モンゴル Ex.に参加して

京都支部 同志社女子大学1回生 菱刈真衣

私にとってモンゴル Ex.は I.S.A.に入ってから初めて参加するプログラムでした。今回のプログラムが私にとって初めての海外であり、期待もありましたが、1回生は2人のみ、上回生ばかりで不安の方が大きかったのを覚えています。

モンゴルでの生活はとても穏やかなものでしたが、自分にとってはとても刺激的でした。草原で思いっきり走りまわったり、サッカーや縄跳びなどの皆で出来るスポーツで体を動かしながらモンゴル人と交流したり、何も無い草原ではありますが、アイデア次第でいろんなことをすることが出来ました。物が有り余っていて、欲しいものを手に入れる手段も多様にある日本で暮らしている私にとってその環境に身を置くことに不便であることも最初は感じましたが、生活するうちにいかに日本で自分が恵まれた環境にいるか、便利すぎる場所にいるかを考えさせられました。

また、モンゴルに行く上で一番心配していた生活環境ですが、想像していたより適応出来ていたと思います。確かに、草原の手作りトイレは日本のトイレとは大きく異なっていましたが、それも今では良い経験だったと思います。草原と比べて、ウランバートル市内でのホームステイでは日本とほぼ変わらない環境で、発展しつつあるモンゴルを肌で感じる事が出来たと思います。

帰国して感じたことは、今回のモンゴル Ex.は私にとって反省点の多いほろ苦い Ex. だったということです。私は上手くモンゴル人と交流することが出来ませんでした。国際交流の厳しさを自分自身で感じました。原因は自分にあります。Ex.の主旨を完全に理解することが出来ずに参加していたことに、モンゴルで生活するうちに気づきました。私は自分から話しかけることが出来ず、一歩を踏み出すことに躊躇して、日本人とばかり会話してしまいました。異文化を肌では感じてきましたが、異文化交流とは程遠かったと思います。しかし、今回は交流が難しいということ、自分の努力不足を感じることが出来ました。また、すぐ隣でモンゴル人とコミュニケーションを上手くとっている先輩方を近くで見て、近づきたい、追い付きたいと思えるような先輩にたくさん出会ったことは大きな収穫だと思っています。また、モンゴルでの生活は日本と違い、時間に余裕があり、通信機器など、日本では当たり前に見えるものが使えない環境にあつたため、このようなことについて自分で考える時間を取ることも出来ました。

今回は満足感を得ることは出来ませんでした。この経験を生かして自分に足りないものを補えるように努力して、次のプログラムや機会に生かしたいと思います。そして数年後振り返ったとき、1回生でモンゴル Ex.に行ってよかったと思えるようにこれから日本での生活を送りたいと思います。

☆モンゴルEX持ち物チェック表☆

<input type="checkbox"/> 航空券(Eチケット)	<input type="checkbox"/> 予定表
<input type="checkbox"/> 現金2~3万円	<input type="checkbox"/> 参加費700米ドル
<input type="checkbox"/> 国際クレジットカード(あれば)	<input type="checkbox"/> 海外旅行保険のコピー
<input type="checkbox"/> 携帯電話	<input type="checkbox"/> 筆記用具・メモ
<input type="checkbox"/> ポケットティッシュ	<input type="checkbox"/> 日焼け止め
<input type="checkbox"/> タオル	<input type="checkbox"/> 爪切り
<input type="checkbox"/> 洗濯ばさみ	<input type="checkbox"/> 変換プラグ(220V50Hz)
<input type="checkbox"/> カイロ	<input type="checkbox"/> サングラス
<input type="checkbox"/> 帽子	<input type="checkbox"/> ダウンジャケット
<input type="checkbox"/> 腹巻	<input type="checkbox"/> のど飴
<input type="checkbox"/> 雨具	<input type="checkbox"/> 楽器
<input type="checkbox"/> タオル	<input type="checkbox"/> 機内持込用化粧品
<input type="checkbox"/> スピーカー	<input type="checkbox"/> 絵具
<input type="checkbox"/> スケッチブック	<input type="checkbox"/> 日本の調味料(しょうゆなど)
<input type="checkbox"/> レジャーシート	<input type="checkbox"/> トイレtpペーパー
<input type="checkbox"/> 汗ふきシート	<input type="checkbox"/> 湿布
<input type="checkbox"/> 日焼け止め	<input type="checkbox"/> 辞書、ガイドブック

―出発当日の最終チェックを忘れずに！―

# Q&A

Q：フェアウェルパーティの服装は？

A：基本は自由です。男の子はいつもの格好が多いですが、女の子はすこしドレスアップしたりおしゃれをしました。現地で自由時間に揃えたり、日本から持ってきたり様々でした。モンゴルにも探せば安くかわいいのがあります。

Q：お風呂は入れるの？

A：ホームステイの時は毎日入れますが、草原生活の時は4日目に1回シャワーを浴びただけです。なので毎日体ふきシートで体を拭いたり、頭が気になる人はときどき水でシャンプーしてました。水のいないシャンプーを持ってきた人もいましたが効果があるとかないとか。顔は毎日洗えます。

Q：特にあったらいいと思ったものは？（女の子）

A：草原はものすごく感想するのでパックやリップクリームなど保湿できるものは必需だと思いました。

## 編集後記

最後まで目を通してくださりありがとうございます。  
モンゴルでの雄大な草原のなかで毎日自然とふれあい、人と関わりながら  
また、水道、電気、トイレなど様々なものがない、  
日本とは大きく違った生活のなかでそれぞれが感じたこと、  
学んだこと、気づいたことは各メンバーのエッセイを見ても  
わかるように様々です。実際あなたが行ってもまた違う感想を抱くでしょう。  
何もないモンゴルだからこそ人によって異なるのです。  
しかし10日間という短い期間でしたがたくさんのモンゴル人メンバーと  
そして23人の日本人メンバーで過ごしたこの思い出は誰にとっても  
忘れがたい素敵なものになったのではないかと思います。  
なんといっても、このプログラムを通して出会えた仲間たち。  
助け合い、分かち合い、笑い合った仲間たち。  
このプログラムに参加しなければ出会うことも、仲良くなることも  
なかったであろう人たちとの出会いは一生の宝物になることと思います。  
またもう一度会うことができるかはわかりませんが、モンゴルでの思い出を  
忘れずにいればいつでも会えることでしょう。それではまた会う日まで。

### 報告書係

内田千晴（九州支部2回）

川原陸（神戸支部2回）

田中麻希（岡山支部2回）

発行元

International Student Association(日本国際学生協会)

発刊日

2013/10